

其説明の如何に拘はらずそが天啓の眞理なりしを聲明する必要ありき。故に説明の困難なる場合に於ては常に聖書は何と云ふか聖書の言葉は何を意味するかと聖書に絶へず訴ふるを常とせり。此の際決して思辯的の要素を借り來ることを許さざりき。従つて信條は聖書の内容を摘録せるものに外ならず。凡そ具體的事實を科學若くは哲學の術語にて言ひ表はせば原物と全然別様の形式として現はる。例令ば一本の雛菊を植物學上の文字にて記載し一曲の音樂を樂譜に翻譯する時の如し。如斯して基督教の日用語として用ゐらるる最も單純なる言辭も之を哲學的の形式に編案する時は全然原意を失ふが如き事あり。之を歴史に徴するに三位一體の教義は決してプラトリーの如く又アリストートルの實體の如き形而學上の產物に非ず。其始は事實として世界に紹介せられたる眞理なりき。而してそが哲學上の言語の中に發表せられたるは後代の事に屬す。換言すれば三位一體論の起元は天啓に依りて神の裡に復重性在り即ち三位の復重性在りとの事實を教へられたるに因る。但し此天啓は餘りに超越的の奧義にして人事に無關係なるが如く思はるれども實は大なる實踐上の意義

あるなり。  
 イエスキリスト曰く「わが來るは羊をして生を得かつ豊ならしめむためなり」と。——十字架の救の究竟目的は一層信實にして一層充實せる又一層美はしき生命を與へむとするに在りき。故にそは空論に非ずして、最も明白なる實踐上の効果を齎すものなりき。然も此効果を完全に受け得むが爲には神の本性と神の人類に對する關係の全體とに就き明かなる智識を獲得するの外なし。誠に基督以前に在りても神に愛ありと言ひたる者ありしも神は愛なりと説きしものなかりき。然して此二個の言辭中には意義上巨大なる差異あり。詩篇記者が神は凡ての人に愛ありと言へるは愛を以て神の本性と爲すものに非ず。唯相對的第二次的の屬性と爲すのみ。即ち此意味に於ける愛情は受造物の存在に依つて初めて行はるゝの愛なれば受造物を離るれば神の愛も活動の餘地無く愛は消滅し終らむ。故に神は愛以外何物かを本性として有する事とならむ。されど神は愛なりとの意義は全然之と趣を異にす。そは神の本性を如實にして吾人に教へたる默示なり。そは愛を以て萬物の絶對原因なりと爲すと同時に愛は萬物の本質な

り永遠の根元なりと爲すものなり。されば全世界は茲に全然新なる解釋を得たるものと云ふべし。詩篇記者の世界觀に依れば宇宙の根元、深淵、真髓には尙愛の光に照らされざる所あるべく愛の光は發作的に宇宙の表面に現はれ來るのみに過ぎず。従つて宇宙には暗黒にして不可知なる境界多かるべし。反之基督の教に従へば愛は最初原因にして又最終原因、根元にして又基礎なるが故に吾人は宇宙の裡に向完全に了解し得ざる神秘を認むると雖も然も安心と信頼の念を以て行動し未解結の問題に遭逢するも希望を以て之に面接するを得べし。加之愛を以て單に創造上の偶然結果にあらずして絶對なるもの、神と同意語なりとすれば必然的に神性中に人格の複重を認めざるべからず。何となれば愛を云爲する以上は必ずや一人が他人に對するの情緒に限れらざるべからず、此意義に非ずば愛なる語は全然明白に無意義なればなり。故に神は愛なりとの宣告を以て此意に解し得ずとせばそは未知は未知に均しとの立言と意義に於て又價値に於て何等異なる處なからむ。

もし神は愛なりとの宣言を根據として人生の刷新起り、人間社界の改造ありし

とせば、當の宣告に實踐的意義と價値ありや否やを確めむために神性の覆面を能ふべくば取り除きて其實相をかいまむとの欲求ありしなり。されば屢無用の思辨的遊戯と誤解せられたる宣言も解剖上最も實踐的眞理なるを明にし得たるものといふべし。

かく曰へばとて勿論基督教第一義の目的が知的啓蒙にありとの意にはあらずと雖も長き歴史を閱する間には基督教も亦知的啓蒙の時期を經過せざるべからず、又事實上此を經過せりとの意に外ならず。

由來知的啓蒙は基督教信條の不離要素と認められぬ。信條は決して實踐上の効果を輕減する者にあらず却て此を増大する者なり。同時に又、信條は心情に訴るに止らで頭腦にも訴ふる者なり。何となれば信條の曰ふ所は之を吾人の思想中に比論を發見し得べければなり。地上に於て吾人の知れる最も麗はしき者人生問題の實際解結として最も眞實なる者は愛てう連帶によりて結合せられたる家庭なり社界なり。此等の圈内には一種の魔力ありて愛の光は各員より全員に全員より各員に相反射し、相反射する間に愈々益々強度を加へ、言説に絶する程熾烈の者と

なり、遂に圏外に立つ者にも餘波を與へ、勢力と歡喜とを鼓吹し、優しき想、思ひやり深き言語、慈愛より出づる配慮コンソヤクを實踐するによりて其感化力を蔓延せしむ。家庭と社界とは吾人の知れる最も氣高き人事にして靡げながら三位一體、神の社界てふ基督教の教義を例證する者なり。神の社界に於ては各員同格にして無限の不朽愛によりて一たり。各員は或意義に於て愛の溢流により自己内部より抜け出て來りて創造をなし維持をなし贖罪をなし聖別をなし祝福をなす者なり。以上は人の社界と神の社界との間の比論なれど、此比論は委曲の點まで押し延ばすべきものに非ず。又此比論は一點の疑團をも餘さず徹底的に氷解せしむるが如き説明にもあらず。蓋し人間よりの比論は神の巨光に照らさるゝとき溶解消散して吾人の案内者となること少ければなり。父は永劫に量りなく子も永劫に量りなく聖靈も永劫に量りなしと。は此れ教會が神性に就きて教ふる所なり。一言にして曰へば、教會の教義は神に對する吾人の思想を一層充實的に一層實在的に一層大なる感化力を與ふるに適せしむ。然るに一切の哲學は絶對者を説明せむとして而も絶對者を神秘の雲影中に殘す。哲學はかくして神に近き（若

くは神の明瞭なる）概念を與る點に於て失敗せるのみならず、行爲を支配し悲哀を慰め人生を發達せしむる點に於ては無限に基督教の信條に劣れり。而して人生を感化する性質及び範圍は畢竟眞に神學と稱すべきものの試金石なり。近代の有神論は神を以て單に論理上の抽象とはなさず、神の統一は宇宙と分離して初めて維持せらるゝが如きものと見ず。神觀中の委曲の見界は如何様に異なるにせよ現代の思想家にして神を萬物の實在的具象的源泉究局的地盤なりと認むる點に於て一致せざるはなし。神は親密にして遍滿せる無所不在性によりて宇宙を一個全體となすと考へざるものはなし。即ち古の語を以て曰へば神は「萬物を支へ」「萬物に充盈するものなり」。

而して吾人の觀察する宇宙の中最勝なる者は人類なり。よし神を不可知者と呼ぶも、尙人格と人格の諸能力の源泉究局根底は神にありと思はざるを得らず。故に神若し宇宙を支配するならば人類が本能的に要求するが如き方法を以て宇宙を支配せざるべからず、即ち人格的感化力によりて支配せざるべからず。隨て神自身は少くも人格的ならざるべからず。但し吾人人類の人格に無限に超越す

る人格を精密に言表はさむがためには超人格なる語を以てせざるべからずと考ふるものあり。若し此超人格なる語にし人格の根本的屬性一切の總括なりとの意に解するならば此語を使用するも可ならむ。そは恰も化學現象を超機械的、生命現象を超化學的と呼ぶときの如く高級の秩序にあるものは下級の秩序にある者を總括し利用するが如き意味ならば可ならむ。されど事實上超人格なる語は此意義に於て用ひられざることあり。時として人格の屬性を剝脱せられたる者恰も結晶體を吸収する水が結晶體の統一形體を消滅せしめたるが如き者と思はるゝとあり。故に此意義に於て超人格なる語は非人格なる語と異らず。只だ覆面の中に含まれし意義を赤裸々に表白せる者が非人格なる語となるのみ。されば二者畢竟は同意語にして只だ超人格なる語の方誤讀を招き易き危険あるのみ。夫れ吾人の有し得る神觀にして充全なるものあらばその神は人格を感化するの力をも有せざるべからず。而して人格あるものは最後の點に於て愛に動かさる。理性に訴ふることも良心に訴ふることも人格の一部を動かす得るのみにして全人格を捉ふる能はず。獨り心情に訴へ愛に訴へて初めて全人を根底より歸服せ

しめ得べし。加ふるに愛は自由を有する者に自由を失はせず威嚴を損はせずして服従せしむる唯一の力なり。而も服従するの止むを得ざらしむる力なり。故にもし神にして宇宙殊に人格の主宰者たらむと欲するならば人の心情に訴へざるべからず、愛によらざるべからず。

「一片の土塊を宇宙となす蟲すら

若し愛あらば全世界を司配して而も

愛なき神よりも神らしとわれは思へり。」

基督教が他の神學に比して勝れる點は此處に存す。プラトリーの神アリストートルの神スピノザの神は心情を動かし得ざる神なり。かくては宇宙を統御し得る神にはあらず。宇宙は彼等の神の有する把持力より墜落し去るべし。ユニテリアン及びサペリウスの神觀も此れと同様にして、正當なる意義に於て神の本性中に愛を措く能はず。隨て彼等の神は愛せざるを得ざるが故に愛し本性が愛なるが故に愛する實在と結び附かむとの人類本能の熱情を満足せしむるを得ず。蓋し愛は人生の諸問題を解結する唯一眞理、三位一體説は唯一の愛の哲學なり。

三位一體論を單に形而上學的の學說に過ぎずとせばそは蓋然性に於て他の學說に勝れる點多からず。然れども三位一體論の世に紹介せらるゝや理論的形式の下に現れず實踐形式の下に現れたるなり。

イエスキリストの來るや最單純なる語を以て神の愛を説き、先づ自己の愛が神の愛の發展なるを内部の團體に説き、次ぎに神性の内部關係を教へて神子化身の可能なる所以を説明せり。それ眞に愛を説かむとする者は行爲を以てせざるべからず。神は愛なりと言ふのみにして實行を伴はずは自家撞著に陥らむ。此點に於てイエスキリストの態度は言行一致す。神子受肉が先づ事實として現れたる後ち神子受肉の教義出でたり。要は二者互に相包含し相豫想する者にして分離すべからざるなり。近代思想は三位一體説を以て單に思辨的のパラドックスに過ぎずと思惟し實行實際を要求する時代思潮に背馳すと考ふ。されど彼等は此事實を忘れたる者なり。三位一體説は歴史上の事實と分離すべからず。此説は歴史上の事實に支持せられ又そを支持す。所謂史上の事實とは十九世紀間世界人心を支配せるイエスキリストの王國是なり。現代に於て此王國の意義を最も論理

的に最も有力なる筆を以て描出せる者は佛蘭西の一大説教家なり。彼の筆力の卓越せる價値は争ふべからざるに他の争論の紛々たる渦中に忙殺せらるゝ現代人は多くは此を認す。然りと雖も彼れが唱ふる無比の事實に至りては誠に十九世紀を閉じたる今日依然として昔日の如く、誠に彼の説くが如し。今日人生を解釋せむと企つる者は愛を以て人生の寶庫に入り得るの鑰鍵と認むる點に於て一致せざるなし。神が宇宙を司配するに宇宙の存在様式に適合するが如き法則を以てし給ふならば人類を縛ぐためには人類の絲を以てせざるべからず。而して人類を縛ぐ絲とは愛の外になし。然るに人類史の或時期に於て一人の人現れ來り自ら神の顯現なりと主張せり。人類の愛を縛がむがために來れる神の自顯なりと宣言せり。果して又彼の人は人類の愛を覺醒し永劫に此を持續せしめぬ。但し彼れが人類を引き寄せ人類を把住するに當りては多少の制限を置かざりしにあらざりしも無限劫に涉りて繼續すべき引力を残せり。而して彼が吹き込める愛の無限に永續する奇蹟は其預見的的中せるによりて益々大なるものとなりぬ。然らば基督教神學の立場は此れなり。曰く。基督教の宣傳する神の教義は天啓

に依るものなりと主張すると同時に其主張が他の如何なる神學よりも一増明瞭なる根據に立てりとの證明あることなり。加之此教義は一個の事實否歴史上最も大なる最も驚異すべき最も重大なる事實によりて支持せらる。所謂一大事實とは極めて超自然的なる而も極めて人間的なる基督の王國にして、そは此教義が眞理ならにあらすんば決して起り得ざる所なるを以て、此教義を必然的に豫想す。同時に此教義の自然的必然的後果は基督以後の歴史事實として表はれたり。抑も此教義は學說と實踐思想と事變との結合なるが故に實踐時代の人々に取りては特種の反響を與ふるの力あり。蓋し實踐の士にして果てして實踐的と稱するに足るならば、必ずや行爲は反省を豫想し實行は原理に基くものなるを許すならん。又吾人の努力吾人の行爲に於て成功を博し得るは之が根元たる思想の健全を證明するものなり。従て基督教が實踐方面に於て成功の著しきは其中心たる教義の卓越せるを示すものなり。

基督教が實踐方面に於て比類なき成功を得たる事と現に成功しつゝある事とは眞面目に考ふる人々の否み得ざる所なり。何となれば基督教は種類に於ても程

度に於ても比類なき愛を鼓吹し愛の力に依て一切の進歩を誘導する諸能力を活潑にし所謂俗社會の發達をも促せり。之と共に世俗的の進歩が如何程大なるも決して除去し得ざる人生の暗黒面―譬へば貧苦、耻辱、悲哀、無氣力、死等の諸事實を救治し逆境の下に沈淪する人を慰藉するの力に至りては古今獨歩なればなり。

斯の如く基督教の教義なる三位一體論と神子受肉説とは之を思辯的見地よりするも蓋然性なきにあらず。實踐的方面より見るも多大の價值あるなり。然らば論者が此等の教義に反對する理由は何處にありや。疑もなく論者が密に抱く所の厭惡の念はそが神よりの默示なりと主張する點にあるべし。勿論如是の主張は之を受け入るゝ人に對し品性及び行爲に要求する所大なるを以て一種の反感を惹き起すの止を得ざるものあらむ。否默示とし云へば無意識的に一種の反感を生じ默示とだに云はずんば同一眞理を喜んで受納し喜んで自家修養の法となす人すらあり。斯の如きは道德上よりの反對なれど近代の思想家には又別様の反對あり。彼等は自然の統一を曲解し自然法則の齊一作用を偏重し此偏見に依

一八八  
て神の人格的干渉に反對する者あり。此反對は非科學的の人々非科學的時代には無意義なりしかと今日に於て大なる力あり。此態度に關しては猶哲學上より非難すべき論點多しと雖も今は只だ讀者が注意を一個の事實に注がむことを勸めて足れりとすべし。曰く。自然と曰ふ語の中には人性をも含むと。

「人一度之を認むれば爾來とこしへに  
神の顯在を一切の無生物中に印す。」

經驗總和中不離の要素たるもの、一は人性なり。人性は最廣義の自然が開展する一切の現象、機械的、化學的、勢力的、有機的、生理的の一切現象を自家内部に包括す。更らに進むで精神生命を有す。元來外界自然の研究は昨今始まれるのみのことなるに精神生命の研究は有史以前より傳はりしことなり。而してこれを指導する多數の天才が如何に雲の如く多きかを考ふるときは近代科學者の如きは物の數に非ず。

人類に宗教本能と宗教的向上心あるは人の最もよく知る所、是等は人類の屬性中最深最普遍最根本のものなり。而してその宗教本能によるに有史以前の昔

より天啓を渴望し居たりき。然るに基督教の天啓はよく此渴望に適合し此を満足せしめ得たる點に於て他の如何なる宗教にも勝れり。基督教の天啓が眞理として信賴の價值あるは科學の眞理に勝るとも劣る所なし。由來科學は證明の可能性もなき假説を愛す。此くの如き假説が何故に眞理として許さるゝかと曰はゞそが經驗上の事實をよく説明し得るが故のみ。然るに同一方法によりて基督教の天啓を検證するに科學の假説以上に強き根據を發見し得。そは宗教の範圍に於ける實驗と符合するのみならず、猶又他の學の諸系統と衝突せず。若し他の學系にして此れと撞著するが如く見ゆるものあらばそが破片的の眞理に満足して生死愛等の大問題を顧みざるが故のみ。然るに何れの科學を問はず宇宙は説明し得べきものなり隨て合理的なりとの根底に立つ。然らば宇宙の最高作品たる人類の靈も亦合理的ならざるべからず。説明し得べきものならざるべからず。故に靈の向上心は何等かの目的なかるべからず。靈性問題は何等かの解結なかるべからず。而して基督教は天啓は此れが目的を示し此れが解結を與へたるものなりと主張す、曰く。

「無上大なるものはまた無上愛なり、  
 般雷の中に人の如き聲聞えぬ。曰く、  
 「わが造れる心情よ、かしこに鼓動する心情よ、  
 わが彫める面よ、わが中に己を見よ、  
 をんみはわれを量る能力なし、  
 されどわれはおんみに愛を與へぬ、  
 われも愛にして汝がために死にし者なれば、  
 なれわれを愛せざるべからず。」  
 と。

### 附 録

#### (一) 人格の自同性。

リード曰く「人格とは見えざる或ものにてライブニツツの所謂モナツド是なり。  
 われに人格の自同性ありとはわが自己と稱する不可見物に連続的存在ありとの  
 意なり。この自己は何物なるにせよそは熱慮し決意し行動し苦悶する或物なる  
 は明瞭なり。われは思想にはあらず行為にあらず感情にあらず。考へ行ひ苦む  
 或物なり。わが思想行動感情は各瞬時に變化す。是等は連続的存在を有せずと  
 雖も繼續も存在を有するのみ。されど是等を所有する我又は我は不變にして繼  
 續的思想行為感情に對し同一の關係を有す。即ち此等凡べてを我がものなり  
 となす關係は變らず。……而して此等一切を余が所有する證據は記憶作用  
 に於て最も明瞭なり。

記憶の範圍内に於て各人自同性を認むるは最も明瞭なる事實なれば此れが確  
 信を強むるためには何等の哲學をも要せず。若し又此確信を動搖せしむる哲學



ありとせばそは吾人の確信を動かすに先ちて吾人の精神を狂はしめざるべからず。同一こう思想を有するに至れるは理性の覺醒により自己の自同性と連続的存在を意識せし當時に始まるならむ。吾人は屢々物質に對して自同性を附著すと雖も……………その自同性は完全なる意義に於て自同と稱するを得ず。物質には漸次的ながら大なる變化ありと雖も人格には程度問題相對上の關係を超越したる明白完全の自同性あり。一切の權利義務一切の責任の基礎は此自同性の上により此思想は最も精確にして最も不動なるものなり(アード知能論三章四節)

パットラー曰く「人格の自同性は何處にありやとの問題は類似若しくは同一なるもの何處にありやとの問題に同じく此れに定義を下さむとするときは常に思想の混亂を招ぐの外なし。然るに類似なる觀念ありとの思想は何等の困難なくして認め得る所、二個の三角形を對照比較せしむるときは類似てう觀念起り、二瞬時に於ける意識狀態又は存在を比較するときには人格の自同てう觀念忽ち躍出し來る。吾人の存在に發見する繼續的諸意識は元より同一のものに非すと雖も

そは同一物又は同一體に屬するものなり。是れ同一なる人格なり自我なり、能働者なり。現在の意識に於ても一時間以前の意識に於ても一年以前の意識に於ても此れが所有者たる人格に至りては二あらず。只だ同一人格あるのみ……………隨て人格自同性てふ意識は必然的に人格の自同を豫想す。されどかの意識が人格の自同を創造し得ざること知識が眞理を創造し得ざるに同じ。「人格の自同性に就きて」上の引用文によりて人格の自同性あるは明瞭となりしならむ。それ人格の自同性は各人自己の内部に直接に經驗する所にして吾人は此以上の説明に溯り得ず。如是の思想は常識並びに健全なる哲學の何れも一致する所なるに現代の人は動もすれば生理的心理學の研究によりて破壊せられたりたる思想なるかの如く思惟す、されど事實は反對なり。元來此思想は其性質上破壊し得ざるものなり。今先きに反對論者の引照文を掲げて其説を聞かむと欲す。エム、リポットの「人格の症徴」に曰く。

「眞の人格を代表し且つ構成するものは肢體と腦漿にして現在過去未來に涉る人格の一切を其中に藏す。能働的並びに受働的の性癖同情反感天才才能愚鈍賢

愚道念の鋭鈍等の一切の全人格は此中に藏せらる。而して意識の識閥上に現出し来るものは潜伏區域にあるものに比すれば極めて僅少なり。而も潜伏域にあるものも猶活動しつゝあることは争ふべからず。有意識的人格は物理的人格の片影に過ぎず。自我の統一とは靈魂論者の唱ふるが如き單一實體の放散して復多現象をなす點にあらず。断えず再生し来る一定數の個々別々なる意識状態の共在に外ならず。故に統一なる觀念を支ふるものは朦朧たる肉體の感覺に外ならず。統一は上より下に來らず下より上に向ふものなり。そは出發點にあらず終點なり。……………隨て心理學的の意義に於て自我の統一とは一定時期の間一定數の個々別々なる意識状態が共在して而も他の比較的不明瞭なる意識状態を伸ひ又無意識の物理課程をも伴ふ。此等の物理課程は他のその如く意識を伴はずと雖も而もその活動の効力は他に比して勝るとも劣らざるものなり。かくて統一とは共在の意に外ならず。」(リポット。「人格の症徴、英譯」)

此くの如き説明は人格の自同性てう直接經驗を雲煙中に葬り了らむとするものなり。されど自同性は内部意識中の確實なる事實なり。然るにリポット一派の之

を破する根據は外部的觀察の結果に外ならず。即ち諸種機關の作用肉體の氣分感覺の故障認識の錯倒疾病狂氣催眠状態等の觀察を集めたるものに外ならず。一見して明瞭なるはリポットの説が始終竊取論點の誤謬を犯しつゝあることなり。そはカッドウオースがホツプス及其門弟を評して彼等は常に一個の圓内に轉廻し舞踏しつゝあるものなりといへるを以て此に適用し得べし。吾人の物質に對する知識と精神に對する知識との間には逾べからざる障壁あり。外部より觀察する丈けにては内部の如何なる運動が如何なる思想と連結しつゝあるかを知る能はず。内部より觀察する丈けにては如何なる思想が如何なる運動を起しつゝあるかを知る能はず。故に吾人は兩者の究竟關係に就きては絶對的に無知なり。然るにリポットは此障壁を一躍して飛び躍え「肉體は人格を構成し」「統一とは靈魂論者流の統一の者にあらず」「自我の統一とは意識状態の共在に外ならず」といふ。これ人格の精神的要素中にあるものは物質を觀察するによりて知らるゝ以外のものにあらずとの義となる。此非論理的の態度はリポットが偶然此際陥りし誤謬にはあらず彼の思想全部に行き亘れる缺點なり。元來統一は

内部意識の事實なるに此を外部的觀察によりてのみ知り得べき要素に分解するは勢竊取論點の誤謬に陥らざるべからず。  
 一層用意の周到なる心理學者は此點を看取するに迂らず。次にヘツフデングの一節を掲げむ。

「個々の肉體機關は相對的獨立を有し完全なるものなるにも拘らず猶細胞の共和國に比し得べし。そは諸元素の複合體にして其起源は勢力不滅の法則によりて説明し得べしと雖も而も此れのみにては意識の個性を説明し難し。如何にして記憶行動苦痛等の特殊中心點が形成せられたるかを説明する能はず。故に如何にして此くの如き内部の中心點が現れ來るかは一切知識の根本問題なり。個々の特長個々の特性は或は遺傳の力又は經驗の力を以て説明し得べし。されど此等は内部に統一あるを預想せしむ。而して統一によりて初めて個性は心理的統一となる者なれども如何にして統一が生ずるかは永劫の謎なり。………勢力不滅の如き法則を以て精神領土に擬するは不可能事なり。されば實際上科學の領土は心理的個性に於て其極限に達せりと見るべきなり。」

「意識現象を外界自然學の主材即ち物質現象と比較して其特性とすべきは正さに個々要素中の内部連絡にして内部連絡あればこそ諸要素は同一主體に屬するが如く思はるゝなれ。」

「生理學は他の自然科學と同様一個の物質課程を説明するに他の物質課程を以てするものなり。さればその因果關係中の一個は空間的に他は非空間的なるが如き場合を含むものに非ず。」

「心理的存在の根本形式は記憶と綜合とにあり。綜合は個性を豫想す。物質界は眞の個性を教へず。個性は只心理的立場より知り得べきのみ。心理的立場より初めて記憶行動持久性の中心を發見し得べし」

「認識と記憶の中には内部の統一現る。物質界には此れに駢行するものなし。」  
 (ヘツフデング心理學梗概、英譯)

以上の引照文は實驗心理學者の説なるが故に一層の價值あり。

論者或は曰はむ人格の物理的解剖は多くの比論を根底とするものなるが故に論理的證明を得難しと雖も而も高度の蓋然性を有すと。されど物理課程と精神課

程との間に逾ゆべからざる障壁あるを如何せむ。故に二個の課程は何等の共通點なきが故に一方より他の方に比論を行ふべき媒介なきなり。此をチー、エツチ、グリーン氏の言に比較せよ。

「神経系統の課程の意識に對する關係が果して化學課程の動物生命に對する關係と同様ならば神經課程に就きて知ること多ければ多き丈け意識に就きて知る所も多かるべき筈なり。然るに事實は此れと反對なるが如し。神経系統と意識との間に連絡なきことは化學課程と生命との間に連絡なきが如しといふを以て正當となすべし。生命は化學的變化以上以外のものなり。生命ある肉體に對して化學變化は貢獻する所なきにあらずと雖もそれは生命の内部に入り來るものにあらず。生命と別様なる要素として只だ其中に介在するのみ。但し化學は生命ある肉體が如何にして構成せられたるかを説明し得ざれども如何なる要素より成り立つものなるかを説明し得。組織の發育血液の構成を分解して構成課程中に分類せば其中には嚴密に化學的なるものあらむ。されど空氣中より吸入せる酸素と一定の食物中に含まるゝ炭素との結合が動物性の熱を構成すと曰ふも未だ

以て其起源を完全に説明し得たりとは曰ひ難し。元より動物性の熱を構成するに酸化作用の必要なるは疑を容れず。然るに意識の能定力又は其様狀を分解するに至りては即ち然らず。吾人は此場合神經過程が其構成要素たるを發見せず。生理學者は腦漿の作用に屬する意識又は音樂家の頭腦中にある樂譜の意識等を云爲すれど其の如き意識の構成要素は何々ぞ、共同的に其の如き意識を作る條件は何々ぞと尋ねなば最後には觀念即ち意識の能定力に遭逢せざるを感ず。此境地には生理學者が曰ふ所の可感的機關の刺戟又は光滲又は感情なるもの入り來らず。元來刺戟光滲感情等の諸關係は意識の統一中に在る觀念間の能定力と全然類を異にし相兩立せざるものなり。此等の諸關係は時空上の區別を預想し恐らくは統一作用によりて可能となり又統一作用の内部より除外せらるべきものならむ。(グリーン、哲學、一章四百七十五頁) 又曰く。

「可感的機關は元より感情と分離すべからざる機關には相違なければ正當の意義に於て感情の主體と稱するを得ず。何となれば機關は感情を自己の感情として意識せざればなり。機關は元來機關のための機關にあらず吾人のための機關

なり。神經又は組織の裝置に統一ありとするもその統一は神經又は組織のための統一にあらず吾人のための統一なり。此くの如き裝置はすべて一なるものとして吾人に現る。但し此に統一と曰ふは諸多の要素が吾人に結合的效果を與ふとの意にしてその一個不可別の成果とは吾人の感情に對する關係なり。相續發し來る諸多の情態を以て一個の經驗と見るとは主體たる「我」が此諸多の感情を自己と意識的關係に置き諸感情を多樣となすの意なり。諸多の感情は之を單獨に引き離して見るときは逐次に消失するものなるが故に多樣とは曰ひ難けれど主體との關係により多樣と呼び得るのみならず、此を統一し得るなり。故に主體は統一の作用を有す否な寧ろ統一體そのものなり。統一作用の現るゝや悟性の名の下に可感的機關の諸要素を連絡せしめ此等を派生的に一なるものとなす。自意識の主體を以て可感的機關の蒐集せる經驗より生ずる進化なりとは誤謬なり。能働者ありてこそ初めて統一が可能なるに統一が能働者を作るとなすは誤謬なり。此は前後の關係を顛倒せるもの經驗心理學の陥り易き謬見なり。(グリーン、哲學、一章、四百六十六)

かくの如く人格を以て肉體機關の產物と見る立場は第一に論理上の誤謬に陥らざるを得ず。次に形而上學に於ても非難せらる。そは上掲の引用文に於て發見せらるゝが如し。グリーン教授の實驗心理學を精細に批判せる所以は此立場の形而上學的誤謬を指摘せむとするものに外ならざりき。元來目的物に對する知識の一切は知識の主體を豫想せざるべからず。隨て主體は知能の條件たる目的物より派生する能はず。こはロツツエが明白に指點せる所にして余は他の關係上此れを引用したることあれど當問題に重大なる關係あれば此に復び引照せむ。「世人は動もすれば曰く何等の豫定もなく只だ經驗のみを基礎として出發する學說はその何れの學術なるを問はず宜しく感覺若くは觀念のみを論じ靈魂なるものに論及すべからず。何となれば正當なる根據を發見せざるうちに感覺觀念を靈魂の所爲となすの弊に陥ればなり。されど吾人の見界は全然此れに異なる。かくして出發するは實際經驗中に含まるゝ或要素を無根據の下に除去して出發するものなり。想へ、主體なき感覺は何れにありや、運動は質量の運動なる以上質量なき運動は何れにありや。若し此れ有りといはゞそは事實に反對なる立

言なり。感覺にして感覺を所有する主體てう觀念即ち感する主體てう觀念を伴はざるはなし。加之他の特徴は知らず感する主體と感せらるる感覺との關係は質量と運動との關係と何等かの相違あり。此れ經驗上知らるゝ事實なり。事實としての感覺は少くも此要素を備ふ。此要素を備へずんば感覺は感覺として成立せず。感覺より感覺の主體に對する關係を抽離するは不可能事なり。但し此關係は複雑なる關係なれば此を抽離して出發すれば一層便利にして單純なる出發點を得るが如く思ふものあれど事實上經驗に發見し得ざる抽象を以て出發點となすが故に斷然不可なり。二個の觀念を比較するときならば其内容の類似と差異とを對照せしむるのみにて足りなむ。されど比較そのものを考ふるときは比較をなす絶對不可別の統一あるを豫想せざるべからず。此豫想を根底として初めて思想の全内界は築造せらるゝなり。即ち吾人の内界は自他續發する復多觀念の集合にはあらず、單一なる原理によりて個々の觀念は結合せられ其相對活動によりて相配合せらるゝものなり、此原理とは意識の統一を意味す。而して不可見の靈魂が存在すとの充分なる原因を提供するものなり。」(グリーン、形

而上學二百四頁)

グリーン教授がロック、ヒューム、スペンサー、レウイス等を批判せる結果統一原理は暗々裡に假定すべきもの到底説明し盡くすを得ずと明言せり。こは即ち此原理が一切知識の必須的根底なるを教ゆるものなり。曰く。

「續發し來る諸多の感情に共通し而も此等と別なる一個の意識あり。此一個の意識ありて初めて諸多の感情の種類上程度上の差異を發見する綜合作用が可能となる。此意識は最初勿論のこと、豫定せられ然る後綜合作用の結果なるが如く詮表せらるゝと雖も綜合作用は畢竟此意識を豫想せざるを得ず。何となれば諸多の感情が此を経験する主體と關係するによりて結合せられんがためには勢此意識の存在を認めざるべからず。然らずんば則ち諸多の感情は一個の組織を形成する材料とはなり得ず。」(哲學論一卷)

一層明瞭の度を加へむがためにダーシー氏の一節を引照せむ。

「自意識とは單に感情若くは思想を有すとの意識に非ず。感情をわが感情、思想をわが思想、書籍をわが見觸れ讀む書籍と認識する際に明かになる意識なり。

自意識とは故に精神が精神を客観視し得る不可思議力なり。而して此力は一切経験中に黙認せらる。然らずば経験なるもの成立せず。自我の統合的能働力とは自我を非自我中の各要素より他の一切要素に自我を推し移らしめ以て一切を一體中に結合せしむる力にして自意識中の根本能働力たり。主體が自意識的な間、即ち自己を自己の目的との對立状態より超越せしむる間、統一の原理と稱するを得べし。故に客観化せられたる自我を以て心理發達上恒常的存在をなす心理状態の一團と曰ふは不可なり。(アレキサンダー、「道德秩序と進歩」七十五頁)如何なる配合による一群の心理状態と雖も直ちに以て自我を構成するを得ず。心理状態が構成する自我は正當なる意義に於て自我と稱するを得ず只派生的の自我を構成し得るのみ。蓋し如何なる心理的配合と雖も此を構成するためには自意識なかるべからず。此を構成する作用そのものの中に暗々裡に自我は自己意識を有す。自己意識を構成する際に既に自己意識なかるべからず。而して経験我を自我と呼び得ざるは肉體を人格と呼び得ざるが如し。(ダーシー、倫理研究短篇集十二頁)

此種の推理を理解せむと欲するとき吾人の感ずる困難はそれが形而上學に屬するが故に其効力を味ひ得ざることあり。此を補足せむがために睡眠催眠及び異常の心理的諸現象等の實驗的諸現象を捉へ來り肉體機關に無關係なる自我若くは靈魂の存在を例證する思想家と著述家となきに非ず。されど如是の經驗的論證をして功力あらしむるためには自己自らその如き経験を有せざるべからず。且つそは經驗説の論者に對する反證としては有力なるべけれど形而上學的證明として嚴肅なる必然性を有せず。此問題は性質上形而上學に屬するものなり。隨て其證明法も形而上學的ならざるべからず。余が諸官能を使用し得る所以は余が自己意識ある存在者なるが故なり。されど諸官能を如何に使用するも使用そのものによりて自己意識を豫定せざるべからずとの思想は起らず。恰も感覺が起るとき感覺の所依たる神經機關を豫想し得ざるが如し。

此議論の詳細なる點を研究せむと欲せばグリーンの哲學卷一を見よ。更らに進んで諸家の批判を見むと欲せばラッドの「精神哲學」を見よ。されど本文中に説けるが如く吾人の人格自同性の最も明白に表るゝは道德上の方面にあり。誠

に自己意識は自己決定力の必然預定なり。従て道徳行爲の必然豫定なり。こは具體的道徳行爲に於て最も明瞭に表る。例せば余が十年二十年三十年四十年以前になせりと記憶する行爲に對して余は責任を感ぜざるを得ず。何となれば昔日善惡の自由選擇をなせる余の人格と今も猶同一のものなるを確信すればなり。而して此自同性と此自由とは超自然と名づくべき範疇に余を措くものなり。但此に曰ふ自然とは物理的因果律と同意語なるを知るべし。是點はグリーン教授が「倫理學入門」に論じて精細に證明せる所、そが實驗心理學者によりて錯覺なりや否やを議せらるゝも吾人は何等の痛痒を感ぜず。(ヘッフジング七章の四)何となれば彼等は自己意識を云爲する權利なければなり。然らば思想一切の主體となり自己意識によりて知られ其以外のものによりて知り得ざる恒常的自我は人格の根底にして吾人をして人格たらしむる所以の原理なり。尤も人格の意義にして具體的性格と同意語なりとなさば此を以て人格といふを得ざること恰も種子を以て満開の花と同視し得ざるが如し。この原理は誠に具體的性格の發展を可能ならしむる所以の原理に外ならざればなり。されども人格の意を以て

人たるの資格又は自己意識ある主體との義に解し氣質又は性格を以て人格の特種状態又は種類を表すものと解すれば吾人の所謂人格は正に是れなり。元より俗語に於ては悲めるときと喜べるときとを合く別人格の人なりと様に曰ひ得べし。而も此れを科學的に使用するとき全然精確なる思想を破壊するに至らむ。具體的の人格とは内觀によりて知らるゝが如き肉體の機關を連絡して存する自己意識の主體なり。肉體の機關は性格を構成する原料を供給すれども此を構成する力を有せず。人格は肉體の機關によりて造られたるものに非ず。肉體機關に對して内より之に反應する方法即ち意志によりて造られたるものなり。肉體には食欲あり本能あり遺傳的傾向あり氣質あり性癖あり神經及び印象にも各特質あり。而も人の惡格は此等のものによりて造られず是等を使用する力方法によりて定めらるゝものなり。此等の中選擇せらるゝものあり。排拒せらるゝものあり。潜勢力全部の中にて或者は意志によりて實現せらる。人は皆一團の特性を有しそが意志の對家とならずして個性の構成に與るにも拘らず。是等の特性も亦意志によりて塑像せられたる中心性格によりて影響せられざるを得ず。而して性



格構成は全然道徳的の課程に属するものなり。自制のために何等の努力をもなさざる人は只だ瞬時の衝動に動かされ其性格は不定不確實矛盾不規則のものとなり了らむ。眞に放埒の人とは此くの如き人の謂なり。彼の性格の諸要素を分解するに何等の凝集力何等の一致なく性格は統一にあらで諸状態の總和に過ぎざるなり。之に反し高尚なる理想を追及し不轉退の勇を以て邁進せば漸次に不整頓なる衝動と本能とを理想に隷屬せしむるを得べし。注意を一個の目的に集中し動作を同一目的に向はしめ生活を簡潔強固ならしめ以て統一を計り得べし。故に形而上學的の統一力は道徳的統一力によりて實現せられ茲に人格の調和状態を構成し得べし。されど事實上多くの人は兩極端の間に介在するものにして衝動に全く支配せらるゝものもなく又完全に自己によりて決定せらるゝものもなし。是れ使徒パウロの所謂靈と肉とが戦ふの状態にして又プラトリーの所謂御者が不齊一なる馬と争闘する状態なり。

意識中に現はる諸種の不調和なる諸要素中嚴密に自我に属するものと考へらるゝものは意志の對象となり道徳的存在者としての吾人に關係あるものゝみ。夢

中の行動に對して何人も責任を感ぜざるは意志の力によらざる行爲なればなり。覺醒時の肉體機關又は外界によりて惹起せらるゝ感覺及び暗示に就きても全然同様なり。それ等が他の人に起り得ざる點より見ればそも亦自我に属するものと曰ふべけれど意志を以て此れを受納する迄は此を以て精確に自己のものと稱するを得ず。悪人の悪人たる所以は惡衝動を意識するが故にはあらず。悪人の知覺するが如き惡衝動を善人も亦之を知覺すれど善人は努力を以て此を排斥するが故に善人となる。通俗の語に善人を性格の人、悪人を無性格の人と呼ぶは意義ある語なり。善人は自己の意志を運用する程度に於て性格の人といひ得べく悪人は衝動の産物又は境遇の製作品にして屢自己の所作にあらず。悪人は外界諸勢力の玩弄物となり人格と曰はむよりは寧ろ物件に均しきものなり。然りと雖も悪人と雖も亦形而上の意識に於て自我あり自意識あるものにして自我の抵抗し得ざる外力と自我とを思想上識別するを得べく隨て自己憐憫の念より自己悔蔑の念又最深悔恨の念に至る諸種の感情を抱き得べし。多くの場合に於て道徳上の失策を幾度となく繰り返し精神の統轄力を失ひたるものは内部の不調

和を感じて遂に自ら複重人格なりと思惟するに至る。曰く。

「わが名は萬軍といふわれ等の數多ければなり」と。

此際注目すべきことは複重人格の最も極端なる例として生理學者の掲ぐる所が概ね不道德なる前行を重ねたるものなることなり。

されば性格の統一とは無限複雑にして無限變化ある諸種の要素が漸次發展進化し來れるものに外ならず。此性格構成の物質的條件を知らしむるは生理的心理學なり。而も此課程をして可能ならしむるものは物質的條件にあらずして自意識ある人格による。而して自意識ある人格は物質中に此れが類似を發見し得ざるが故に内省によりて知るの外なし。又そが吾人に知らるゝや肉體機關との關係に於て知らるゝのみなるが故に肉體の瓦解と共に人格も亦消滅せざるを得ず。此際消滅するものは單に自意識のみにはあらずで肉體と連合して自己意識を構成したる具體的の性格即ち道德化せられ又は不道德化せられたる自我も亦消滅する故に死は物理的生命並びに道德生命を途絶せしむるものなり。故に死は道德的に、隨て究局學的に、觀察せざるべからず。死を考ふるときは感覺の認むる所

のみを考へず良心の要求する所をも合せ考へざるべからず。現世に於て未成品なりし道德の歴史は死後に於て完成せらるゝものと考へざるべからず。現在に於て人格の自同性を確信せしめたる道德意識は來世に於ても連続して存在するものと考へざるを得ず。されば人格自同性の發端も又終局も形而上學的にして且道德的なる以上變態病理學の研究によりて毫も動搖せらるゝことなし。自同性が一種の疾病に遭ひて消滅せむとするは死によりて消滅するてう事實の片影に外ならず。死によりて自同性が消滅するも猶吾人の來世觀に痛痒を感せずとせば況んや疾病に於てをや。ヘッフデング、リポットすら彼等の立場を危くするの憂なきに非ずと雖も疾病及び死に對する見界には生理學以上の意識あるべきを自白せり。曰く。

「此際吾人の唱導する學説は元來形式上物質的の之れなれど之を形而上學に適用せしめて何等の不都合なし。吾人は意識的人格を以てそが直接所依たる肉體機關の作用なりと様になせども究極の條件、條件の條件が何ぞやてう問題に至りては吾人何の曰ふべき所を知らず。」(リポット人格の疾病百五十四頁)

「吾人は此際實驗上の式語を以て結論をなすと雖も一層包含的なる形而上學的學說を排斥するものに非ず……事實は却つて反對なり。認識論によるに吾人の意識現象は經驗の根本なるを知る。こは論理上より觀察するに主觀的の立場よりも一層強固なるものなり。此見界に従へば心理生命を本性的と考へ心理生命に對應する大脳の活動を以て心理生命の感覺的直觀に顯現する形式と考ふるを以て最も自然となす。」(ヘップディング心理梗要二卷八)

ブラッドレー氏の「假象と實在」中には自我の觀念に關し注目し價すべき記事あり。曰く。

「人格自同性に於て主要なる點は人格なるものゝ意義を確定することに存す。而して人格の自同性に就き更らに進歩せる結果を得る能はざる所以は主として此れに關する吾人の思想の混亂に基く。」

ブラッドレーの批判は稍破壞的に傾くものありと雖も猶彼は「事實上自同性は存在す。故に如何にしても自同的自我は實在ならざるを得ず」と許せり。元來彼れが實在的自我を認定するに少からぬ困難を感せしは實在なる語を絶對者又

は神以外に附着し得ずとの彼れ獨特の實在觀より派生し來れる者なり。彼の曰ふが如く實在なる語を絶對者又は神にのみ附着し得べしとなす思想は或意義に於て全然眞理ならむ。されど一度實在中に程度あるを許さば前にも曰へる如く自我が吾人の知り得る最高實在なりと稱するを得べし。元より自我の實在は神より派生し神に所依する者ならざるべからず。而して具體的人格にして最も道德的に、隨て意識的に、最もよく神と結合する者は最高の實在を有する者最も強固なる實在なり。之に反して不道德なるもの隨て最も多く神と離れたる者は非實在的にして最も不調和なる實在なり。されば時として放埒は瓦解を意味し存在を確立し得ざる自我は全然消滅する者に非ずやとの疑さへ起ることあり。以上を約言するに

(一) 直接に知り得べき人格自同性を實驗に徴して知らるゝ諸要素中に分解せむとするときは論理上の誤謬に陥る。而して一度誤謬に陥るや如何に多くの實驗的知識を加すと雖も遂に此を除き得ず。

(二) 人格自同性の積極的證明法は形而上學的證明法なりと雖も常識と分離せるも

のにあらず。却て常識の確信する所を哲學的分解によりて辯護するものに外ならず。

(三) 人格の自同性を證明するに猶一の方法あり。道德上の證明是れなり。此證明法は一層明白にして(イ)責任の感と(ロ)永生に對する要求とに根底を置く。然らば人格の自同性は何處にありやと問はれなばロツツエと共に各靈性は統一體なり。こは自明の真理にして其生命は一定種類の觀念感情及び努力によりて表ると答へざるを得ず。換言すれば吾人は此統一體を説明せむとは試みず。只だその存在を定言し得るのみ。生理學の力を籍りて此れが説明を試むるもそのは不充分ならざるを得ず。世に唯物傾向の思想が絶滅せし時なし。科學の新裝を帯び來るや常に唯物的臭味を帯びて現る。現代の生理的も亦此一新裝なり。而も生理學が唯物論を確立し得ざること恰も古代の天文學又は其他の科學が此を確立し得ざりしに異らず。テニンソン曰く。「子若しわが手や脚がわが存在の形表的符徴に過ぎずと語り給は、余は子の言を信せむ。されど子若し余に向ひて余は永却の存在に非ず。靈は余が眞我實我には非ずと告げ給は、余は子を信せじ

否な信じ得ざるなり」と是は詩的空語にはあらず、哲學上の真理なり。(人生二卷九十頁)

## (二) 自由意志

自由意志の問題に就きては拙著「人格論」二百二十七頁に於て諸種の著述家の典據を引照して註解を加へ置きぬ。此問題に關し諸派の著述家中用語の差は則ち之れ有りと雖も等しく肯定的の立場を強く主張する點に一致あり。されど生理上並びに心理上より之れが反對をなすものなきに非ず。故に聊か此れが辨證をなすの必要ありと信ず。

「第一に自由の意志あればこそ人格の自同性あるなれ。而して自由意志も人格自同性も經驗上より肯定し得べく前立的蓋然性なき點より否定し得べし。ジョンソン博士は自由意志否定論を聞きて大に憤懣に堪えず絶叫して曰く「凡べての學説は自由意志を否定すれども凡べての經驗は此を肯定す」と。誠に博士の言は大に吾人の注目に價するものなり。元來物理的が通俗的見界を破する場合は大かたは經驗上誤りなきものを根底とし以て俗間の偏見を打破し健全なる常

識に立ちて勝ちを占むるを常とするに此場合に於ては則ち然らず。吾人が自由意志を有すとの確信は人類に共通なるものにしてその顯現は全生涯の有ゆる行爲中に認め得べく人は皆日々此を實際に行ひつゝある所なり。隨て自由意志を否定する哲學者すら實は自家撞著にも自由意志を實現しつゝあるなり。蓋し議論は蓋然性を豫想し蓋然性は自由意志を豫想せしむるものなればなり。故に自由意志を否定する學者は事實上の證據より之れが存在を否定するものに非ず。只だ自家の既に受納せる學說と不兩立なるが故に此を拒斥するのみ。(ロッツエ、人類機械論一章三百九十九頁)

以上の所論丈けにては猶自由意志の眞義に就きて誤謬の餘地を残さざるに非ず。蓋し自由意志と曰ふと雖も決して無動機、無制限の意志ありと曰ふ意にはあらず。此點に關して甚しき誤謬をなすものなきに非ず。

第一に自由意志とは無動機の意志との義に非ず。故に今日は混同を避くるために自由意志の代りに自己決定力なる語を用ふるものあり。されど自己決定力なる語も意志必然論者に専有せられて以來全然原意を曲げられて誤解の種を蒔け

り。人類の行動が動機によりて決定せらるゝは何人も首肯する所なれど此動機は何處より來るかに就きて疑問なき能はず。抑も自己決定力とは行爲を規定すべき動機を選択する力なり。隨て自己の行爲を規定する原力なり。即ち語の示すが如く自己を決定する力なり。然らば如何にして人は自己を自ら決定するを得るか。曰く。人類に自己意識あるが故なり。人類に自己意識あるが故に自己を外界と區別し得るのみならず猶又精神内に現るゝ諸觀念と自我とを區別し、精神内部の諸思想を自我より抽象し自我と別物なるものとして之を心眼の前に置き此を恰も外側よりするが如く諦視し得るなり。又精神内部に入り來る諸觀念中吾人の慾望を促進し吾人の動機を刺戟し吾人を動かして行動せよと逼迫するものあり。此種の觀念と雖も吾人は他の觀念同様に取り扱ひ此れに虜はることなく恰も傍觀視するが如き態度を取り得るなり。かくて其中より吾人の従はむと欲する觀念を選択し得るが故に自ら自由なるものとの自覺を生ずるなり。此際吾人は最強なる動機に従ふは論なし。されど動機が最強となるためには先づ選擇の作用によらざるべからず。而して此選擇作用は全然自家確立の作用に

二八  
 屬す。余は諸觀念中の特殊なるものを余の動機となさむと欲し自己を此動機と  
 同化せむと欲す。故に自己決定力とは畢竟自由意志の記載的別名に外ならず。  
 然るに意志必然論者の一輩は自己決定力なる語を曲解し「決定」の二字を偏重  
 し自己に決定せらるゝとの用語に於て自己を性格と同意語なりとなす。故に此  
 意義に於ける自己決定は宿命説と同じものとなる。即ち人類の行爲が必然的に  
 性格によりて決定せらるゝことは恰も外部の力によりて物質の運動が決定せら  
 るゝに似たりとなす。されどこは自己決定力なる語の眞義にあらず。猶又此語  
 を初めて紹介せる人の眞旨を傳ふるものとは曰ふべからず。  
 自己を人格又は自己意識の主體と見ば自己發展せる人格即ち性格と見るものと  
 全然意義を異にす。而して自己決定なる語に於ける自己は實は前者の意義にし  
 て後者にはあらず。吾人は自意識ある存在者として自己の動機を選定し以て行  
 爲を規定し行爲によりて性格を規定するの力あり。元より生れながら特種の性  
 癖及び氣質を賦與せられあるが故に將さに發展すべき性格の萌芽を最初より有  
 するものなり。而して此等の勢力は性格の發育と共に増進し來るものなり。

されど此等の勢力は決して自己決定力と同一ならず。否な性格によりて規定せ  
 らるゝこと多ければ多き丈け益人は自己決定力によりて支配せらるゝこと稀れ  
 なるものとなる。即ち意識的選擇力を有する自我に従ふの度益少くなるものな  
 り。誠や性格は時間の推移と共に前日選擇せる行爲の梗概となり記録となるは  
 見易き道理なりと同時に重要な眞理なり。何となれば之によりて吾人は無意  
 識的の傾向を行爲に實現し日常は自動的に行動し得るを以てなり。例へば考へ  
 ずして文字を記し考へずして音曲を奏し得るが如し。されど此種の行爲は事實  
 上自動的なるに拘らず努力的に此れと反對なる行爲に出でむと欲すれば出で得  
 ざる限りにあらず。只だ黙認して此れを採用するが故に眞に自己の行爲自己の  
 動作と思ひ得るなり。蓋黙認して採用すとは畢竟精神的に自己決定力を運用す  
 るの意に外ならず。

故に自己決定力とは自由意志の別名なれども自由意志といふよりも一層精密な  
 る用語なり。そは動機の必要なるを示すものなるが故に純意志不決定論者及び  
 無制限なる自由論者に反對すると同時に一方に於ては動機を以て慾望以上のもの

のとなし自意識の主體に對する目的と見るが故なり。かくてこそ自意識の主體は自己を欲望と識別し欲望を自己のものと決定するもせざるも自由なるものとなるべきなれ。

ケース教授は此意味を別様の言語を以て發表したり。かく諸家の間に用語上の差異あるは却りて其内容の眞を一層強からしむるものなれば左に引照せむ。

「稍舊式の思想と思はるゝの嫌なきに非るも道德上の常套語を籍りて曰へば吾人は理性を以て感情を制御せざるべからずと教へらる。而して此は自由意志の問題を正當に解結したるものと見るべし。元來徳義に就きて云爲する人士が均しく睿智の能力を認むる點に一致するは注目すべきことなり。然るに道德家の意志を論ずるに當て此を閉却するは怪しむべし。抑も意志は最強の欲望と獨立の狀態にあり得るや或欲望に對して従ふも従はざるも自由にして意志は自由の選擇をなし得るや否や是れ究盡すべき問題にあらずや。事實上睿智が善なりと宣言すれば意志は此に従ひ睿智が悪なりと宣言すれば意志は此を拒斥するを得。かく睿智の熟慮によりて善惡を判定したる後意志はその何れかに従ふの自由を

有するものなるが故に意志は欲望に對して獨立し従ふと従はざるに就き自由決定力を有するなり。……………意志は欲望の兒女にあらず又親なし子にあらず。意志は睿智の産兒なり。元より睿智自身は行爲の原因たる能はずと雖も而も睿智中の善なる觀念は意志中の善なる決意を促し以て意志を媒介として結局行爲の原因となり得べし。吾人の欲望を制御するや意志により意志を制御するや睿智による、若くはバットラーの曰へる如く行爲性格を反省し此を以て思想の對象となすの力によりて制御す。然らば意志は睿智が熟慮後善なりと斷定せる者を爲さんと決定する能量なりと定義し得べし。……………余は自由意志の構成要素を悉く列擧し盡くせりと曰はず。然れども意志決定論者の所謂人は造次願沛にも欲望憎惡習慣氣質と外部境遇との結合せるものによりて規定せらるるの學説を破せりと信ず。何となれば人は時々此等の動機一切の對象に就きて熟慮し善なりと判定し得る限り之れ等に從ふことを得ればなり。熟慮的睿智の存在すことそれ丈けにて意志必然論者を破するに足れり。(ケース、「道德上の實證主義」十六、十九、廿四頁)

此れと同一真理を六世記以前に道破せる聖トマスの簡潔なる文字を對照するは趣味あることなり。曰く

「睿智は結局意志を動かす。何となれば善なりと理解せられたるものが意志の目的となり、終局(原因)として意志を動かすが故なり」と。

以上は自己決定なる用語の意義を論述したるものなり。かく相對立する諸動機を選択するの自由ありとは余が「人格論」に於て簡單なる證明を試みたる所猶註解中には此に就きて譯論せる大家の引證を掲げ置きぬ。要するに自由なりとの事實は選擇の瞬間に於ける自覺作用より成り。而して後其選擇を是非するに よりて愈強固となる。古より此自覺作用を迷妄或は錯覺と稱して自由意志の存在を否定せるものあり。此は甚だ專斷的の立言なるに此を辨護する理由として又均しく專獨的なる二箇の立言を提出す。曰く。

(一)吾人は過去に於て別様の選擇をなし得たるならむと思ふ。何となれば后日に至りて回顧すれば性格の變更せるを感じかくの如く變更せる性格ならば別様の選擇をなし得たるならむと感ずればなりと。此提言に對しては二箇の批評を以

て充分に解答し得べし。(イ)意志必然論者の説によるに一個の選擇は必須的に第二の選擇を産み既成の性格は到底既往の決斷を非難し得と考ふる能はず。何となれば既成の性格は現在猶既往の決斷の方向に進みつゝあればなりと。(ロ)選擇の自由を最も強く感ずるは回顧する時にあらず選擇の瞬間にあり。此際時として吾人は選擇努力の苦悶のために道德的存在の各纖維を破裂せずと思ふ程に緊張の状態にあるとあり。後日に至りて不正行爲を再檢するとき到底別様の行爲に出で得たりと保證し得る者にあらず。ショーペンハウワーが自説の辯護のたなめに引用せるウォーター、スコットのハンナの場合の如きは稀れなる場合なり。後日の同想が吾人に保證する所は當時別様の行爲をすべき筈なりしこととなり。而してこは當時感じたりと記憶する所にして當時吾人が自由なりしを確信せしむるものなり。

(二)諸多の勢力に動かさるゝ物體が意識を與へられれば必ずや自ら動くと思ふならむ。何となればそれは最強力即ち最も烈しく動かす所の力に従へばなり。かくの如く人類が自由を感ずるは唯だ彼等に意識あるが故のみ。隨て彼等を規定す



べき動作に従ひ自ら爲さむとする所を欲求すと思ふが故のみ。されど吾人が自由を自覺するは單になさむとする所を欲求すとの點に存せず。同時に若し選ばい別様の欲求と決心をなし得と感ずるが故なり。吾人は自働的活動力を意識的に傍觀し得、これ日常吾人が實驗する事實なり。されど此種の意識が意志行爲に對する態度と零壞も雷ならぬ差別あるは吾人の熟知する所なり。然るに第三の提言は此二事を同一なりとして取り扱ふ。故にこは物理的自由と道德自由、無碍の自由と有意的自由とを混同せるものなり。而して此混同は甚しき混同と曰はざるべからず。吾人もし努砲より一個の石を發射せしに其石が突然意識的になりたりと假定せば如何。石は疑もなく自ら無碍の意義に於ける自由を感ずるなるべし。されどそが明々地に感ずる所は意志を以て方向を轉廻し得ざる點にあるべし。而してこは正さに道德的自由の意義なり。隨て吾人が今假定せる比喻は道德的自由と没交渉なり。この比喻は只だ無碍の自由に適用するを得べく到底道德的有意的の自由に適用を得べきものにあらず。隨て道德的自由を迷妄なりと断定する能はず。そを試むるならば全然失敗ならむのみ。

凡てて自由の感を迷妄なりと速断するものは概ね此類のみ。彼等は豫め結論を作り然る後假説を設けて此を辨護せむと試む。事態の性質上此種の假説が充分の證明を得ざるは當然のことなり。意志必然論者の立論より一切の假面を剝脱すれば彼等の立場は下の形式に於て表し得べし。曰く。「自由は元來錯覺なるべき筈のものなるが故に錯覺ならざるを得ず」と。曰く。「自由の感が錯覺に非ずば法則の司配を如何せむ。殊に勢力不滅の法則を如何せむ。物理運動は物理力の影響によるにあらずんば方向を轉ずる能はず。故に自由意志の侵入すべき餘地なし」と。あゝ、何の不合理か之に勝らむ。

更らに例を以て此を證せむか。財政官は今一書狀を受領したるが故に其内容を精神中に回轉しつゝ世界の各部に事務上の命令を電達せり。又一婦人ピアノの前に坐して其友一曲を所望せしに彼女は愛曲を考へ現在の精神状態を想ひてベートーヴェンの一曲を奏で出でぬ。又一將軍の許に敵軍の運動に關する報告ありたれば將軍は此を邀ふべき軍略を考へ或聯隊を派遣して其任に當らしめむと決定しぬ。以上の事例に於て特定の物理的前立は特定の物理的結果を伴ひぬ。

されど其中間には人間の意志の干涉介在したるため結果の特質全體に影響を與へぬ。勿論他の命令を發することも他の曲を奏することも他の聯隊を危地に向はしむることも凡べて皆可能のことなりしならむ。他の選擇をなせしならば其結果は無限の差を生せしならむ。蓋し人間の熟慮は連續せる物理的事變の中間に侵入し來り意志の意識的作用によりて事變の方向を轉廻せしむるものなればなり。かの物理的運動は大脳の關中に没入したる後一又方向に向ひて再現し來るが如きものにあらず。煌々たる意識の燈火に照らされ其光明中に爭論討議せられ再び現出し來るまでには意識内部に起れる作用の影響を伴ひて出で來る。是の點に於て人類の意志が物理勢力の方向を轉廻する事實に就きて最も明瞭最も直接最も親密なる證明を得たるものといふべし。

更らに物理運動は物理力の影響によらずんば其方向を變せずとの提言に就きて考へむか。此命題の誤謬は一層顯著なり。此は物理學に於てのみ全稱肯定として正當なるものなるに形而上學に應用して全稱否定となし以て自由意志に反對する理由となすものあり。元來全稱否定命題は吾人の知る如く最も妥當なる範

圍内に於てすら此を取り扱ふは危險なり。然るに物理學者が確言し得る範圍は物理現象の内部にあり。即ち物理範圍に於て物理的見地より觀察すれば此命題は充分なるものなるべし。而も物理範圍以外にも能力あり。此種の能力は物理の機械を以てするも物理學の研究法を以てするも研究し難きものなり。故に此能力が何を爲し得るか何を爲し得ざるかに就き物理學は一言も云爲し得ざるなり。而も此能力の存在は人類一般の經驗する所又批評哲學の確認する所今更ら改めて聲明する必要な程なり。博士ジョンソン曰く、「吾人は自ら自由なるを知る。又われ何をか曰はむ」と。

されば自由意志の問題は全然形而上學の件にして人類一般の認むる所なり。こは形而上の範圍に限ることなれば物理學の學說と没交渉なり。故に其性質上物理學を以て檢證するを得ず、否な最も親密なる關係を有する所の腦漿の作用中に於てすら檢證する能はず。例せば現今の科學に於ては神經纖維と神經細胞との間の關係は不明なり。又延髓細胞の物理的特質、隨て最單純なる反射運動の起源すら猶不可解なり。否な延髓細胞が向上向下神經纖維の間の連結連鎖を構

成するものなりや否やさへ不確實なり。猶ほ脊髄中の遠心神経と求心神経との間の解剖學上の連絡さへ指摘し得ざるなり」(ヘッフチング)。

されど今假りに此等の不明瞭なる點が將來の科學によりて闡明せられ神経運動の全機械組織が悉皆分明となる曉にも猶此種の檢證法は確實となるを得ず。生理的方面より見たる腦漿の連絡的官能が分明になりたるとするも(これ將來の科學進歩に對する大躡歩なり)其連絡官能に隨伴する意識が果して其連絡の條件なりや否やは疑問なり。チンダルが曰へる如く吾人の有する機關は悉く必要なるものに非ず。又必要なるべきもの、發端にもあらず。連絡的官能に生理的間隙ありとするも猶全過程は靈によりて品節せらるゝこと恰も生理的機關を構成する分子が全體の生理過程によりて其機械的特性を品節せらるゝが如し。

論者或は曰はむ。同等に生理的なる運動の特性中一方は腦漿の外部にあり一方は腦漿の内部に存すとの區別を設くることは難し。若し生理的前立が靈的隨伴者を伴はずして常に腦漿の外部に起る作用を規定するならば腦漿の内部に起る作用を特別に假定する理由なしと。此反對論を提出するものが唯物論者ならば

吾人は彼に向ひて宇宙の究竟問題を考へよと勸告すべし。宇宙の究竟問題を考ふるべき唯物論は破壊せらるべし。されど此反對論は宇宙に靈の存在を容すものによりて提出せらるゝことあり。此種の論者に對しては吾人は本文に論せしごとく如何なる物質的運動も靈的隨伴者を伴はざるなしと答へむ。されどもし一切の物質的運動が神より出し靈的隨伴者又は條件を伴ひ而もその常態に於ける作用が齊一なる故に認識せられざるものとせば腦漿の運動が人の靈に所依し人の靈に支配せらるゝと想像するに何の非論理かある、何の不確實なる點かある。加之此に注意すべきことは人間の人格が吾人の經驗中無比の事實なることなり。故に他の場合には起り得ざることとも人間の腦漿中には起り得と論ずるは人の想像するが如く非論理的なることにあらず。人間の腦漿は之を單獨に考ふるるときは他の物質的微分子と同様のものなりと考へ得べきも實際に於て無比の現象と結合状態にあり。吾人の經驗範圍に於て他に比儔を發見し得ざる事實と結合の狀態にあり。凡そ全然別異の條件裡にある二個の場合に於て一の條件裡に起れることを根據として他の條件裡に起ることを推測斷定するは不合理なり。形而

上の假定と生理上の假定とは全然別物にして相對立せしむべきものなり。一方の假定を分解すること愈多ければ他方に此を適用するの愈困難なるを發見すべし。ロツツエが此消息に就て論せる所は傾聽するに足るものあり。曰く。

「生理的事と物質的事とは比較し難きものならば類似のみ類似に反應し得と想ふは無根據の偏見なり。又靈魂と肉體との相關關係が例外的場合なりと考ふるも亦誤謬なり。かかる場合には物質と物質との關係と兩立せざるものあるを發見するが常なり。……誠に感覺寫象に於ては類似物（少くも外觀上類似なるもの）の相關關係の外連續的寫象として表象せらるゝことなし。されど如何なる場合にも同種の特性を把持せむと努むるものは只だ感覺心象のみにして、感覺心象は同種の特性を以て物靈間の關係に於ける根本條件となす。而してこれ正しく感覺心象が自家を欺く所以なり。……吾人の知り得る限りすべての機械作用は各部固形を維持し各部運動を傳達し得るが故に行はる。されど元素は如何にして相結合し不變の固形體を作るや、如何にして元素は運動を傳へ得るや。是れ物質相互の反應作用上根本的課程なるに吾人は肉眼を以て

這般の消息を知悉する能はず。此作用に關係する各部が相類似すとの事實は何等の説明とならず。吾人は物質相互の外面を知覺するのみにして其相關作用が如何にして起り得るかを説明する能はず。これ物靈相反應の關係を知らむと欲するときに必要な知識に非ずや。而も吾人は如何なる方法にて最後の原子が靈魂を衝擊するかを見る能はず。また肉眼を以て見得る物質相互の關係に於ては二原子の衝擊が運動傳達の原因なるを知る能はず。衝擊は只だ吾人をして何物か起りつゝありと想像せしむるに過ぎず。凡そ一切作用の不可缺條件を悉く發見せむと勗むるは誤謬なり。質量なき非物質的靈魂は濃密なる物質質量に反應する能はずと思ひ、具形的世界の衝擊は無形體の陰影に近づき難しと主張する皆此類の誤謬に陥らざるはなし」（ロツツエ形而上學三卷一章百三十六頁）然りと雖も自由意志の存在を聲明する必要あると同程度に於て自由意志の實踐上に於ける制限を認むる必要あり。自由意志の問題全部が不明瞭の雲に封さるゝは多く此制限を認めざる罪に墮す。又制限あるが故に淺見者流は全然其存在を否定せむとし其態度は正當なるものと見誤らるゝことあり。物理的必然の連

鍛より僅かに一髪の微を移すこと、是れ吾人の自由を構成するものにして又吾人をして責任ある道德的能働者たらしむる所以なり。而して此意義に於ける自由は實質的實踐的自由と別なるが故に此を稱して形式的自由と稱せむ。こは實質上に其結果を印する所以の形式なり。此は實現せらるべき潜勢力なり。活用せらるべき作用なり。これなくば隨て實際的積極的自由もなからむ。吾人の自由なるは自由ならむがためなり。吾人が第一義の自由を有するは第二義の自由に入らむがためなり。而して積極的自由も潜勢的自由も共に一切方面より制限あり。

(一) 第一に物理上の制限あり。吾人は物理的の勢力を創造するの自由なし。只既成の物理勢力の方向を定め得るのみ。此區別は實證的のそれにして又極めて重大なるものなり。自由意志の存在を否定するもの多くはそが宇宙の秩序を混亂するを以て理由となす。但し人心に就き精確なる科學を築造せむとする心理學者に取りては恣に物理勢力の方向を變ずるの力は物理勢力を創造する力と同様の混亂を招ぐものと思はれむ。されど事實は反對なり。吾人が物理勢力の方向

を變じ得るてう事實は決して宇宙の秩序を擾亂するものに非ず。擾亂せらるるものありとせばそは只だ心理科學のみ。ペーコンの「自然を征服し得るは只此に服従するにあり」との反面は明らかに吾人に物理勢力の此方向を轉じ得るの力あるを教ゆ。宇宙に充滿する諸多の勢力は各瞬時に其方向を轉じつゝあり。而して人間の行動は明々地にかく變化する諸勢力の一たり。而して人間の行動が内部より見て自由なりとの事實は毫も外部より見て他の物理的前立の如き關係を變せず。そは自然的事變の結果を變更せしむることあらむ。而も決して擾亂せしむるものには非ず。吾人が熟慮しつゝある間吾人は自由なれど毫も物質的秩序を變更せず。一度行動をなすや吾人は物質秩序の内部に没入し以て其一部となり其秩序に服従す。かくの如く自由意志は物理の制限を受けて世界の秩序を擾亂せしむるを得ず。故に自由意志が眞に創造的能力を有するならばそは道德的分野に限らる。

(二) 次ぎに體質上より自由意志は制限を受く。一切事は無より創造せられず。吾人の性格を塑像するや既存せる氣質性癖才能傾向環瑾等を基本として塑像す。

是等の要素なくば道德的又は不道德的何れの人格をも作る能はず。而して是等の要素は機會境遇等と共に人格の個性を限定し且つ形成するに大なる力あり。故に吾人は體質上善となるも悪となるも自由なるものなれども一毛の髪を白くすることも黒くすることも能はず。只だ生れながらに有する個性を實現し得るの自由を有するのみ。

(三) 更らに道德上制限あり。個性實現の課程は制限的の課程に變化す。遠き昔に於て既にアリストートルは曰へり、「行爲は習慣を作る」と。近代の生理學者は之に附言して曰く「神經の勢力は最小抵抗の方向に向ひて流る」と夫れ習慣が制限を齎らすものなるは勿論のことなり。習慣が強固となればなる程吾人は此れに抵抗する能はず。善惡又は無賴者等の習慣は漸次に吾人の身の上に附着し、風俗は人生の推移につれて吾人の重荷となる。かくの如くして吾人の性格即ち習慣律は形成せらるゝなり。元より性格は適當の努力を以てすれば全然變更せしむるを得べし。されど努力の困難となるに正比例して意志必然論者の説が事實上の眞理に近づく。人の行爲は性格によりて測定し得べく從て過去によりて規定

せらるゝに至る。

以上論じたる如く吾人の自由意志は各方面より實際上制限を受く、此等の制限あるが故に自由意志の存在を否定するものゝ態度が正當なるが如く思はる。然りと雖も物理的及び體質的の制限は自由意志の本性と無關係なるものなり。其範圍を狹隘ならしむることあり得べしと雖も其本質を變せしめ得るものに非ず。只だ道德的制限のみは其本性に關係するものなれどそれは自家の造れる制限なり。何となれば當初に於て選擇の自由ありし所に只だ習慣がこれを奴隸化したるのみ。故に性格は人を決定すること多しと雖も畢竟性格に對して人は責任を免るゝ能はず。

更らに一步を進めて考ふるに第一義の自由意志とは實現せらるべき潜勢力活用せらるべき作用なり。換言すれば自由なる状態なり。然るに實際上自由意志の作用は各方面より制限を受く。然らば實際の自由は如何にして自由の状態に附着し得るか。そは外部の制限を以て自家の制限に換へ自家の擴張となすことにあり。人若し制限を自家の制限とせず鐵道線路を横斷するならば自家の自由を確立す

四六

るが如くなれど實は死によりて自由を全然失ふものなり。之に反し汽車中に制限せらるゝ人は脚力の及ばざる遠地に達してかくて自家の自由を擴張するものなり。これ物理的制限を受け入れ其勢力を自家の勢力となし之を主人となさず奴隸となすものなり。罪人は國家の法律を無視したるがため獄に投せられて自由を失ひ。善良なる市民は國法を遵奉して其保護の恩澤に浴す。吾人は法律を離れて自由なるにあらず法律に従ひて自由なるなり。法律に従ふは法律行為と自己を同化することなり。法律の力を自己の力となすことなり。法律に従ふは自由意志によりて自己の自由意志を棄つることなり。故にパラドックスの如しと雖も基本的形式的潛勢的自由意志は棄てむがための自由意志なり。之を棄て、初めて實際上の自由を得べし。同時に吾人の自由を構成するものは此降服をなすの力なり。この力あればこそ吾人は法律を選択して法律の支配者となり法律の奴隸となることを免るゝなり。形式的自由は活用すると同時に消滅するものなりと雖も結局の自由を得るための必要條件なり。同一の選擇行為が幾度となく反覆せらるゝ時はそは徐々に固形化し自由意志を制限するものな

れど正當なる選擇行為は自由意志を強固ならしむるものなり。凡そ人生の如何なる分野に於ても其分野に固有なる法則のなき所はあらず。此法則に反抗し反抗的習慣を造らば其法則は儼手として吾人の自由を奪掠すべし。之に反し吾人にして習慣的に法則に従ふことを學ば、法則は吾人の能力を増さむ。健康の習慣は肉體の能量を増し實業上の善習慣は富を増し勉強の習慣は知識を該博にし靈的習慣は敬虔の念を加ふ。而して如何なる場合に於ても習慣を獲得する迄吾人は自由なる能はず。習慣を選定することに誤ることなく法則に於て服従を學ば、其度に吾人は益積極的自由を得。新たなる法則と親む度毎に吾人は利器を新たに獲得す。かくて現世に於て吾人は益自由となり諸多の勢力は益吾人の願使するがまゝとなるべし。而して自由を得るとは吾人と宇宙の法則との調和が益強固となることなり。即ち自由はかくして宇宙の系統に混亂を引き起さるに至る。或思想家著述家の如く自由意志が秩序を破壊するものなりと思ふは全然誤りなり。

更らに一步を進めて考ふるに自然の法則とは吾人有神論者の所謂神の意志に外

ならず。隨て法則に服従することを學ぶは神の意志に服従することを學ぶ所以なり。神の意志と結合すれば神の力は吾人自家の力となり従て神に仕ふるを以て完全なる自由となすに至る。

「如何にとは知らずわれ等の意志がわれ等のものなるを知る。

われ等の意志がわれ等のものなるはこそをもて主のものたらしめむがためなり。」

(テニソン)

テニン又曰く人の自由意志に於けるは籠の鳥に於けるが如し。彼は低き樹に棲り得べく又高き棲り木に攀づるを得べし。されど彼らが知り又は爲す所のものは一層一層に棲り木を高く大ならしむるの必要を生じ彼は遂に籠の屋根を打ち破りて宇宙の大意志と結合せざるべからず。(人生一卷三百十八頁)

人類に與へられし最初の自由意志は罪を犯さざる能力を有せしと同時に罪を犯すの能力をも有せりき。然れども後ちに與へらるゝ自由意志は罪を犯すの能力を有せざるべきが故に最初の自由意志よりも有力なり。誠に後の自由意志も亦神の恩賜なり。そは自由意志の本性によりて然るに非ず。蓋し神たるは神性を

分有することゝは全然別事なり。神は自己の性質上罪を犯し得ずと雖も神性を分有するものは其罪を犯さざる能力を神より享くるものなり。かくして最初の自由意志は罪を犯さざる能力を有し。後の自由意志は罪を犯す能力を有せず。

(神の都、廿二〇卅七、オーガスチン)



明治四十三年四月十五日印刷  
明治四十三年四月十八日出版

金七拾五錢



翻譯者 尖倉保

發行者 東京市芝區高輪北町三十番地  
イ、ライアソン

印刷者 東京市京橋區木挽町二丁目十三番地  
佐藤保太郎

印刷所 東京市京橋區木挽町二丁目十三番地  
中屋商店印刷部

東京市神田區小川町壹番地

發行所

普光社

神戸市中山手通三丁目五番地

販賣所

聖公會出版社

# 新刊廣告

細具邦太郎先生譯

## 基督教師父傳

四六版美製  
定價金四拾錢  
郵税金四錢

師父の生涯は教會の花なり、師父の殉教は信仰の告白なり、見よ彼等を苦むるに猛獸の爪牙あり、天を燎く烈火あり、悲絶又憤絶を極む、而も其間節を屈せずして遂に芳勳を千歳の下に放つ是れ當に信者諸君の好適著にして敢て座右に一篇を薦むる所以なり譯文平易何人にも讀み易し

立教高等女學校長小林彦五郎先生譯

## 神學基督教徒の品性

定價金參拾錢  
郵税金四錢

原著者は英國思想界の泰斗イーリンググオース博士なり、其述る所は基督教徒の生命と品性とに必要缺く可からざるものは果して何物たるかを説明したるものなり、譯者は英文に堪能なる宗教家にして又教育者なれば譯文平易にして何人にも讀み易く、且つ十分著者の意を穿てりとは諸方の批評なり。

小林彦五郎先生改譯

## 福音の道

定價金七拾五錢  
小包料金八錢

本書は一時絶版の姿なりしが、各地諸彦の勧告に基き先生を煩して平易に改譯したるものなり、舊に比して面目を新にしたる所多し。

イー、ライアソン編 神原彌彌先生譯

## 聖公會之立脚點

一部定價金參錢  
五十部金壹圓參拾錢

本小冊子は我聖公會の立場を闡明にせんがため、ヒエーロンの監督ウキリアム博士が監督教區五十年祭に述べられたる所を編者の手によりて取捨撰擇せられしものなり、教會の起原、聖職權の由來を述べ、更らに聖公會の内容を述ぶる等一目聖公會の主義主張を明かにす、信者諸君の一讀に價するは勿論傳道用としては蓋し好適著ならんか、譯文平易にして又た雄健なり。

木村義治著

## 現代偉人の言行

四六版美製  
定價金參拾五錢  
郵税金四錢

著者は重に隠れたる我國の偉人を選び其最も風教に益あるものを探へて論評したるものなり、軍人あり、教育家あり、政治家あり、宗教家あり、實業家ありて、一讀卷を掩はざらしむ。

近刊書籍

稻垣神學士著

新神學と舊宗教

菊版總クローズ

グレンジャー著

電車のたとへ

トラクト

ミス、パレード俗解

通舊約全書拔萃創世記

菊 半

穴倉文學士譯

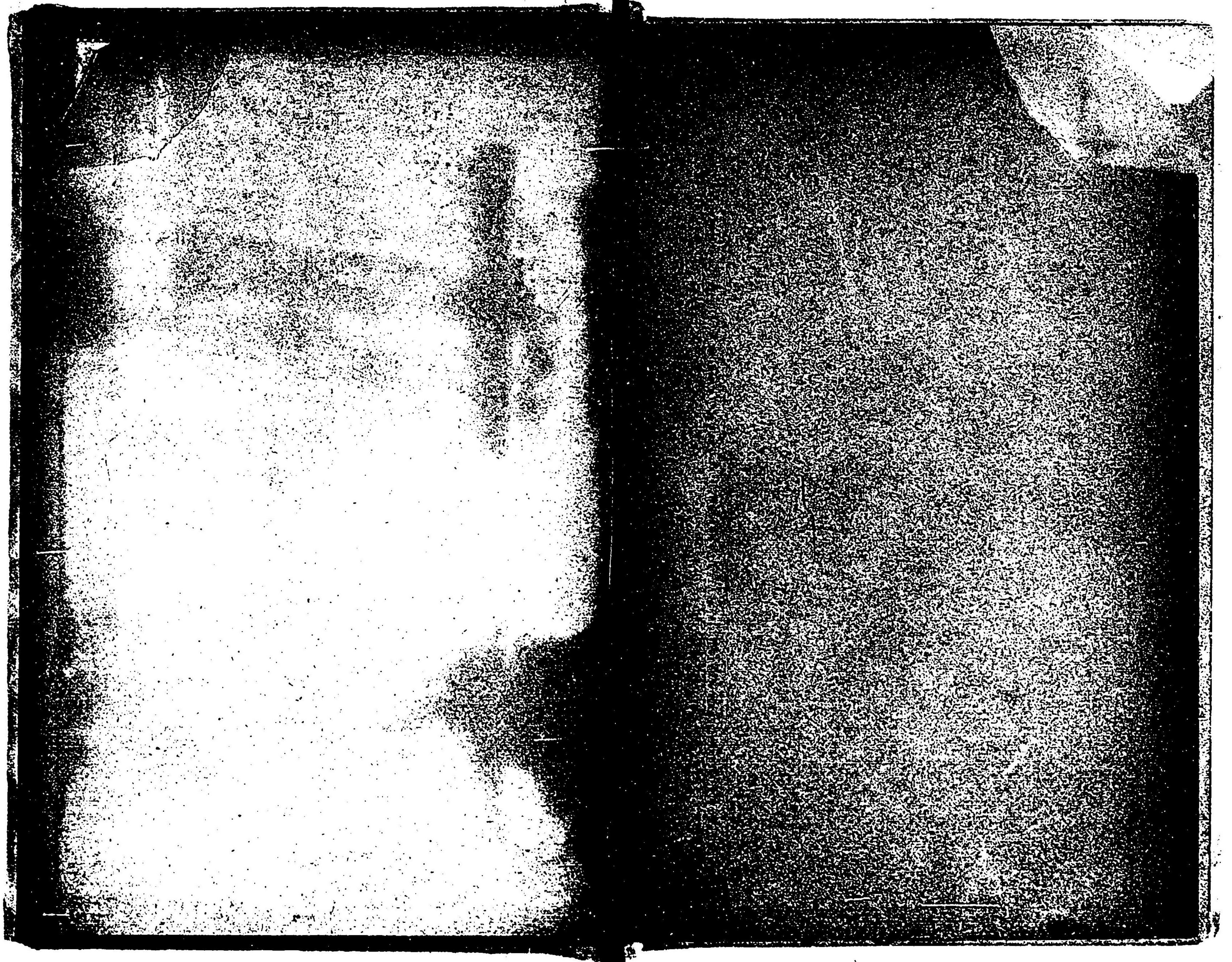
復活の證

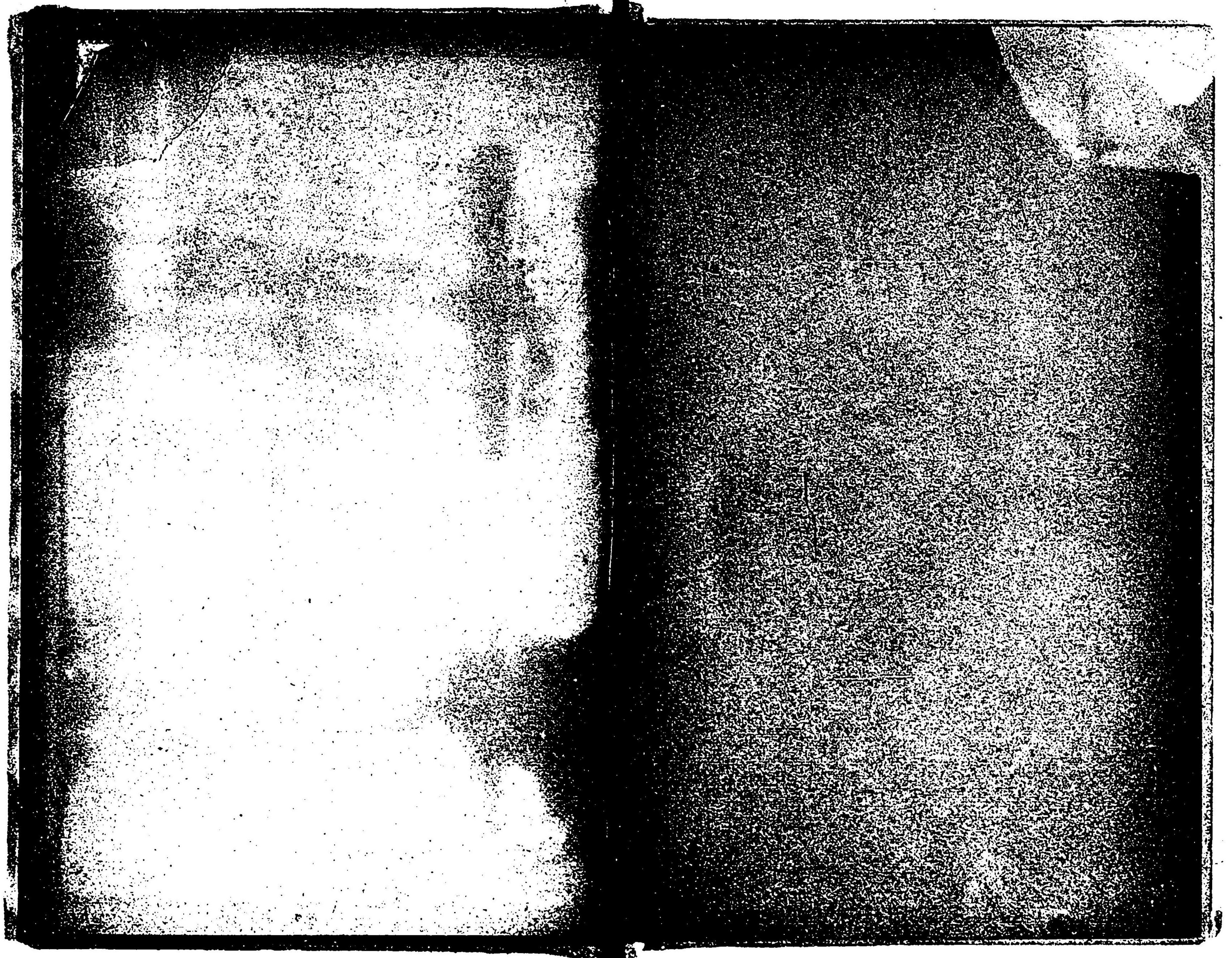
菊 半

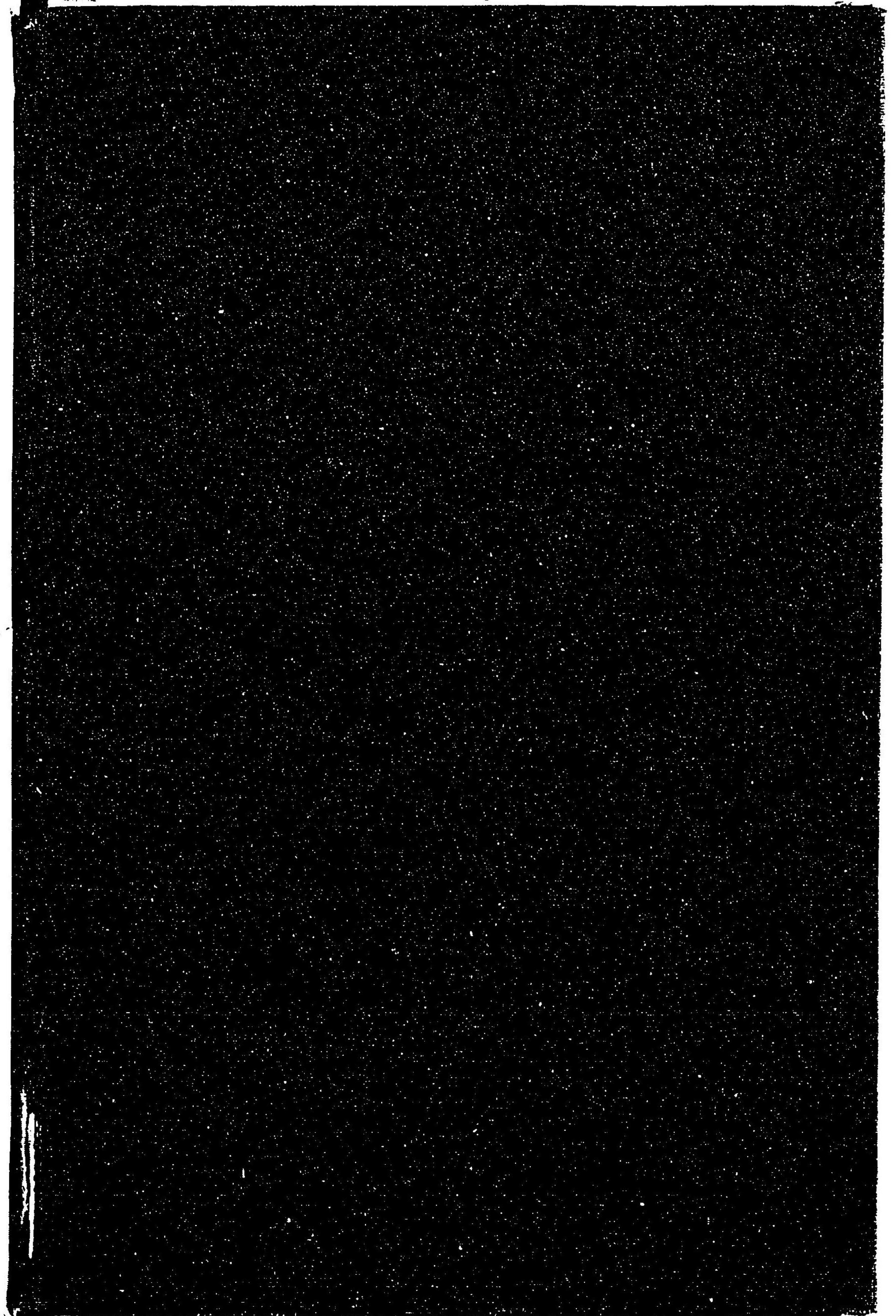
島田弟九譯

死後最初の五分時間

菊 半









020345-000-2

330-7

神の内住

イーリングオース/著

M43

ABI-0151

